

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.259

2014年12月

第10回名古屋大学ホームカミングデイを開催



## 目次

### ●ニュース

第10回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
地震防災訓練を実施	7
あいちサイエンスフェスティバル2014を開催	8
下村文部科学大臣が赤崎記念研究館を視察	9
第25回日本数学コンクール及び第18回日本ジュニア数学コンクールを開催	9
第46回経営協議会を開催	10
支援学生団体 air（あいる）が PEPNet-Japan Award 2014受賞	10
第51回須賀杯争奪駅伝競走大会及び第50回記念プレート除幕式を開催	11
文部科学省「女性研究者研究活動支援事業（連携型）」に採択される	11

### ●知の先端

大気中の微粒子の起源と影響について調べる	12
松見 豊（太陽地球環境研究所教授）	

### ●知の未来へ

社会的ネットワークの「つながり」を科学する	14
五十嵐 祐（大学院教育発達科学研究科准教授）	

### ●部局ニュース

医学系研究科医系研究棟3号館竣工及び鶴舞キャンパス100周年記念式典を挙	15
行	
「国連デー記念イベント at Nagoya University」を開催	16
3カ国教育大臣らが教育学部と附属学校を訪問	17
第9回名大病院市民公開講座を開催	17
名古屋－延世大学間学術研究交流会2014を開催	18
「国際機関合同アウトリーチミッション」を開催	18
国際シンポジウム「多数のハザードをまとめて考える」を開催	19
減災館第1回特別企画展を開催	19
ナショナルコンポジットセンター連携協定締結記念イベントを開催	20
ヨゼフ・ステファン研究所との学術交流協定を締結	20
2014年秋季特別展を開催	21
第3回地球教室を開催	21
第104回防災アカデミー開催	21

### ●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成26年10月16日～11月15日

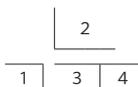
●イベントカレンダー	26
------------	----

### ●ちょっと名大史

名古屋大学創立75周年ー50周年から四半世紀の名大ー	28
----------------------------	----

# 第10回名古屋大学ホームカミングデイを開催





- 1 世界にはばたく名大生の様子
- 2 天野教授への記念品贈呈後の記念撮影
- 3 開催あいさつをする豊田全学同窓会会長
- 4 国際交流貢献顕彰授与式の様子

第10回名古屋大学ホームカミングデイが、10月18日(土)、東山キャンパス・大幸キャンパスにおいて、全学同窓会の協力のもと開催されました。当日は、爽やかな秋晴れとなり、同窓生や在学生の家族、近隣住民の方々を中心に4,500名を超える参加がありました。

今回は、大学院教育発達科学研究科を全体行事の中心部局として、私達がどのように情報化社会と向き合い、発展していく社会と融和していくのかを参加者とともに考える、『情報化社会における融和からの発展』をメインテーマとしました。

当日の運営には、教職員をはじめ、名大祭本部実行委員会を中心に陸上部、サッカー部に所属する学生にも協力を求め、持てる力を合わせ、来場者への応対、駐車整理などの業務にあたりました。

### ■名古屋大学の集い

豊田講堂においては、周年同窓生（卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年を迎えた同窓生）を中心

に、2014年ノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授をお祝いするムードの中、多数の方々の参加のもと、「名古屋大学の集い」を開催しました。教育学部卒業生である東海テレビ放送の浦口史帆アナウンサーの司会進行のもと、はじめに、濱口総長、豊田章一郎全学同窓会会長から開催にあたってのあいさつがあり、次いで、伊藤義人全学同窓会代表幹事・ホームカミングデイディレクターからの全学同窓会活動報告が行われました。続いて、天野教授から、ノーベル賞受賞を受けてのあいさつがあり、総長、豊田会長より花束と記念品が授与されました。続く、国際的人材群創出のさらなる促進を目的に行われた名古屋大学国際交流貢献顕彰授与式では、名古屋大学全学同窓会カンボジア支部のマモン・サムレット支部長及びバングラデシュ農業大学教授であるシャヒドウル・ハク氏、マンダレー大学予防社会医学講座のサン・サン・テイ講座長の3名が選出され、当日出席したシャヒドウル・ハク氏、サン・サン・テイ氏に表彰状と記念品が授与されました。





また、「世界に羽ばたく名大生」では、濱口総長、カンボジアへの留学経験を持つ法学部3年の小田侑哉さん及び司会の浦口アナウンサーの3名が登壇し、小田さんのカンボジアへの留学体験を中心に話しました。その後、インターネットのテレビ電話システムを利用し、現在、カンボジアの王立法経大学に留学している法学部2年の倉田淑実さんも参加し、4名で名大生の留学の現状等について語り合いました。

これらの企画終了後には、指揮者に三ツ橋敬子氏、フルート奏者に上野由恵氏を迎え、名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートが行われました。アンコールの演奏後には、楽団のメンバーから、赤崎特別教授、天野教授のノーベル物理学賞受賞へのお祝いのメッセージが掲げられました。

#### ■学術講演「“iRules”：ネット社会に対応した良識ある家族を育てるために」

シンポジオンでは、今回のホームカミングデイの中心部局である大学院教育発達科学研究科の企画としてジャネル・バーリー・ホフマン氏による学術講演が行われました。ジャネル氏は現在、ネット時代の家庭教育についての作家・実践家として活躍中で、息子にiPhoneをプレゼントした際に、その利用のための親と子の契約書を同封したことが世界的に話題となりました。講演では、ジャネル氏が考える現代におけるネット社会との関わり方



などが述べられ、会場は、老若男女を問わず、多くの方でにぎわい、総勢120人を超える聴衆が集まりました。

#### ■講演・体験企画「災害を知って備えよう」、あかりんご隊「色が変わるフシギ☆」、「太陽から地球まで」

減災館では、施設公開とギャラリートークが行われました。1階では、長周期地震動を再現できる環境や、詳細な地形模型とハザードマップを融合した展示、防災・減災について学ぶパネル展示のほか、名古屋市周辺を一望できる航空写真、耐震を学ぶための模型、キッズ工作コーナーなどが設けられ、多くの方が足を運びました。また、ギャラリートークでは、「建物の耐震ことはじめ」と題して、福和減災連携研究センター長から、建物の耐震について、ユーモアを交えた分かりやすい講演が行われ、来場者は、熱心に説明を聴いていました。

野依記念学術交流館1階カフェスペースでは、本学の理系女子学生で構成されている「あかりんご隊」が、子供向けの科学実験「色が変わるフシギ☆」を実施しました。実験に参加した子供たちからは、驚きの声や歓声が上がり、大いに盛り上がる実験となりました。

学術講演終了後のシンポジオンでは、「太陽から地球まで」と題した講演と「地球温暖化のしくみ」、「PM2.5を作ってみよう」などの大気に関する実験が行われ、参加者が熱心にメモを取る姿が見られました。





### ■市民公開講座

今回の市民公開講座は医療に関することをテーマに行われました。ES 総合館 ES ホールでは、「窓口での医療費支払いを安くするためには」と題した講演が行われました。野依記念学术交流館カンファレンスホールでは、高齢化に伴い社会問題となっている認知症に対して、どのように対応していけばよいのかを考える「認知症と戦う」と題した講演が、4名の演者から行われました。

なお、当日は、大幸キャンパスにおいても市民公開講座が開催され、「もっとよく知ろう！さまざまな“浮腫”（むくみ）とその対策」、「地域で安心して、自分らしく暮らすために～医療と福祉の連携の視点から～」と題した講演が行われました。どの講演にも、多くの方が参加し、医療への高い関心がうかがえました。

### ■2014年ノーベル物理学賞特別展示

豊田講堂2階ロビーでは、青色発光ダイオード（LED）の開発で2014年ノーベル物理学賞を受賞した赤崎特別教授と天野教授の特別展示を設けました。両氏が本学でともに研究に取り組んでいた当時の写真から、受賞発表後の会見写真や、赤崎特別教授が今年度の恩賜賞・日本学士院賞の授賞式で天皇皇后両陛下への青色LEDの説明に用いたデモ機などが展示されました。この展示には、ホームカミングデイに足を運んだ多くの方が訪れ両氏の功績を讃えました。ま



た、これまで本学関係者でノーベル賞を受賞した先生方の業績や足跡を展示しているケミストリーギャラリー（野依記念物質科学研究館）、2008年ノーベル賞展示室（ES 総合館）、そして赤崎記念研究館を紹介した「ノーベルロード」マップを配布しました。マップを片手に各施設をまわる参加者も多く見られ、各施設は大変なにぎわいとなりました。

### ■第12回学生フォーミュラ大会総合優勝レーシングカー展示

ホワイエでは、本学のフォーミュラチームFEM（FEM）のレーシングカー展示が行われました。FEMは今年9月に開催されたモノづくり総合力の競技会である第12回学生フォーミュラ大会に出場し、初の総合優勝を収めました。展示では、大会へ出場した学生自らが構想・設計・制作したマシンが展示され、展示を見学した豊田全学同窓会会長も、熱心に学生に質問していました。

### ■第19回特別展「絹谷幸太 創知彫刻」作品解説

博物館では、第19回特別展「絹谷幸太 創知彫刻」作品解説が行われました。彫刻家の絹谷幸太氏によるノミで石を削る実演も行われ、石の切り出し時には、参加者から拍手と大きな歓声が沸きました。

また同館では、電子顕微鏡で身近な動植物を観察する「ミクロの探検隊®」、「野外観察園公開」、石器石材や動物の骨格標本を触る「ハンズオン・ギャラリー」が行われました。

1	2	5	6
3	4	7	

- 1 講演するジャンル氏
- 2 体験企画「災害を知って備えよう」の様子
- 3 体験企画あかりんご隊科学実験「色が変わるフジギ☆」の様子
- 4 2014年ノーベル物理学賞特別展示の様子
- 5 赤崎記念研究館の様子
- 6 レーシングカー展示を見学する豊田全学同窓会会長
- 7 博物館特別展の様子



### ■多彩な展示と施設公開の数々

耐震改修工事を終え、リニューアルした附属図書館では、館内紹介のための「オープンライブラリー」と、所蔵コレクションから「学び」にちなんだ資料を紹介する「時を超える贈り物ー所蔵資料が語る学びの世界ー」が行われました。

豊田講堂ホワイエでは、学内の各研究所の研究紹介、大学文書資料室企画の「名古屋大学創立75周年記念展ーあの総長の時代の名大ー」が展示され、歴代13人の総長を1人ずつ紹介するとともに、在任期間中の本学の歴史についても展示され、同窓生からは昔を思い出し懐かしむ声が聞かれました。

また、今回も超高压電子顕微鏡施設、メディアスタジオ、スーパーコンピュータの見学ツアーが行われ、毎回多くの方がツアーに参加し、普段見ることのできない大学の設備などに直に触れていました。

### ■スポーツ行事「名古屋グランパススクールコーチによるサッカー教室」

陸上競技場では、ホームカミングデイの恒例行事となった「名古屋グランパススクールコーチによるサッカー教室」が行われ、サッカーの基本プレイやミニゲームを親子で楽しむ様子が見られました。



### ■販売コーナー

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、本のリユース市、農産物の販売、大学生協による名大グッズ等の販売が行われ、ノーベル賞受賞の効果もあり、LED関係のグッズを購入する方が多くみられました。本のリユース市では、学術書など通常では手に入りにくい図書が安価に入手できることもあり、今年も多くの方が本を買って求めています。農産物の販売では、フィールド科学教育研究センター東郷フィールドの大地で育てられた新鮮野菜や果物、お米が販売されました。

### ■同窓会企画行事・一般向け行事・保護者等向け行事

各学部・研究科では、同窓会関係行事や講演会などが行われ、同窓生だけでなく、在学生の保護者、一般市民の方々も参加し、同窓会総会・懇親会など、同窓会ならではの行事も数多く行われました。

今年も学生相談総合センター就職相談部門や大学院環境学研究科が、それぞれ卒業生を招き座談会を実施しました。企業や行政へ就職した同窓生からは、在学生や保護者に社会人としての生活や、大学時代の研究と今の仕事の関係などについて説明があり、保護者等からも活発に質問がありました。

教育・研究をはじめとする現在の本学の取り組みを紹介するため、保護者等向け行事が開催されました。教育目標・教育課題、進路・就職状況等に関する説明や教員と保護者との面談形式での相談会など、部局ごとに趣向を凝らした内容となりました。保護者等向け行事の参加者には、大学生協で昼食がとれる無料食事券を配付し、日頃、学生が食べている食事を提供しました。

キャンパス全体で、趣向を凝らした様々な企画が催され、秋の一日を楽しむ参加者の様子が見受けられました。

1	2
3	

1 スポーツ行事「親子ふれあいサッカー教室」の様子

2 本のリユース市の様子

3 農産物販売の様子

## 地震防災訓練を実施



一斉避難訓練の様子

地震防災訓練が10月28日(火)に実施されました。今年度は、全学一斉避難訓練、自衛消防隊の活動訓練、災害対策本部の訓練の3点を中心として、災害時の安否確認訓練や各部局の独自訓練などが行われました。

一斉避難訓練は、午前11時30分に緊急地震速報が放送され、続いて震度6強以上の強い揺れが継続することを示す地震の音が、約2分間流れました。この間、全員が机の下などで安全を確保する行動をとり、揺れが収まった後に屋外の一次避難場所に避難して、最後に避難者確認などが行われました。

今年の避難訓練は、授業中の教員や研究室の教職員による適切な避難誘導と、一次避難場所での避難者確認を重点課題としました。災害直後に安否を確認する作業は重要であり、今回は事前に準備した名簿による確認と、学籍番号や氏名を記載した避難者確認カードの提出・集計などを試みました。結果として避難者のほぼ全員を確認することができ、インターネット上のクラウドを用いた安否確認システムとの連携も含めて、災害時の安否確認の体制整備に向



災害対策本部会議の様子



自衛消防隊の活動訓練の様子

けて有効な成果が得られました。

最終的に全学で約9,000人の避難者が確認され、活動中の自衛消防隊員や諸事情で安全確保行動のみの訓練を行った人数を加えるとこれまでで最多となる12,000人以上が訓練に参加しました。

2点目の自衛消防隊の活動訓練は、本学の特徴であるブロック自衛消防隊(本部隊と各建物隊)の充実を目標としました。そのために、自衛消防隊員の具体的な行動内容をまとめた「災害時対応の手引き」を新たに作成し、災害発生時には各建物で設定された拠点に集合するなど組織的対応を徹底し、事前に各ブロック・建物で確認したうえで訓練に臨みました。ブロックの防災担当者からは、訓練後に「建物隊の活動が定着してきた」という感想も聞かれ、数年にわたって取り組んできた成果が確認されました。

3点目の災害対策本部の訓練は、新築された減災館の災害対策本部室で行われました。減災館は免震装置を備え、非常時の電気、水、ガス、通信・放送設備、食料などが確保され、余震が続くなかでも一週間以上の災害対応活動が可能な施設となっています。訓練はまず、災害対策本部が事務局及び全学自衛消防隊により設営され、情報収集や連絡等の対応を始めます。次に、全学自衛消防隊がトランシーバやMCA無線により各ブロック自衛消防隊の活動をまとめ、情報を集約して本部に伝えます。その後、学内状況確認を終えた本部員が加わって、地震発生後初めて災害対策本部会議が開催されるという設定で訓練が実施されました。

今後、担当者のヒアリングや実施報告、参加者のアンケートなどに基づいて課題整理を行い、体制整備や一層の防災力向上につなげていきます。

なお、訓練が行われた10月28日は1891年の濃尾地震、1707年の宝永地震が起きた日で、東海地域の防災において重要な日となっています。今後も、原則としてこの日に全学一斉の地震防災訓練を実施する予定です。

## あいちサイエンスフェスティバル2014を開催



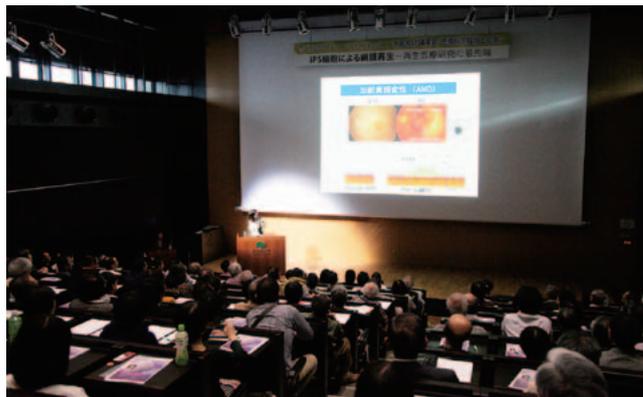
さかえサイエンストークの様子

あいちサイエンスフェスティバル2014が、9月27日(土)から11月3日(月・祝)の間、愛知県全域の会場で開催されました。今年で4回目を迎える本フェスティバルは、愛知県内で人々のサイエンスへの関心を喚起し、交流と議論の場を生み出すことを目的に開催しています。学術研究・産学官連携推進本部内に事務局が置かれ、愛知県内の大学・科学館等による「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」(平成26年11月現在、20機関)の連携により、企画運営されています。これまで3年間の独立行政法人科学技術振興機構(JST)からの助成期間が終了し、今年度は本学の独自予算で運営されました。また、11月に名古屋で開かれたユネスコ「持続可能な開発のための教育(ESD)世界会議」に向け、一部ESDを意識した内容としました。

事務局では、4つの講演会、25のサイエンスカフェ(うち1つは台風により中止)、1つの子ども向けイベントを開催しました。講演会「先端科学技術と社会」では、ESDを牽引する立場から、竹本和彦国連大学サステナビリティ高等研究所所長と、百瀬則子ユニークグループ・ホールディングス株式会社執行役員が登壇し、サイエンス最前線



「エコで『くつつく』サイエンス」の様子



講演会「先端科学技術と社会」の様子

の研究者として、高橋政代理化学研究所網膜再生医療研究開発プロジェクトリーダーと、近藤孝男理化学研究科特任教授が登壇しました。

期間中、月曜日から金曜日の夜には小規模での対話的な交流を目的とした「さかえサイエンストーク」が、栄地区の会場で開催されました。5週間をそれぞれ、「なるほど理系講義 week」、「ジオ week」、「未来社会創造 week」、「ウイメンズ week」、「エシカル week」とテーマを設け、「未来社会創造 week」では未来社会創造機構の教授陣がゲストを務め、サイエンス研究最先端の話題を提供しました。「ウイメンズ week」と「エシカル week」では若い女性参加者も多く見られました。子ども向けのサイエンスカフェと工作「エコで『くつつく』サイエンス」では、ものが「くつつく」性質をテーマとし、工学・化学・植物学分野の本学研究者3名のサイエンストークと、廃品を用いたエコ工作を実施しました。これらの事務局主催イベントには、延べ900名以上が参加しました。

これらの催しの他にも、「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」参加機関の主催等により、40を超えるサイエンスイベントが開催されました。愛知県図書館による「サイエンスセミナー」、名古屋市鶴舞中央図書館による「図書館サイエンス夜話」、豊橋市自然史博物館による「名古屋大学出前授業 in 豊橋」は、事務局との共催イベントとして開催し、本学の研究者が、最先端の研究を市民に分かりやすく講義しました。科学館、博物館、動植物園等では子ども向けのイベントも多数提供され、本フェスティバル全体として、数千名がサイエンスの魅力に触れる地域科学祭となりました。

## 下村文部科学大臣が赤崎記念研究館を視察

下村博文文部科学大臣が11月9日(日)、本学を訪れ、赤崎記念研究館を視察しました。

今回の視察は、11月10日(月)から名古屋市で開催されたESD世界会議にあわせて本学で開催された、ユネスコ世界会議関連行事への出席のため下村大臣が本学を訪れたことで行われました。



視察の様子（左から、下村大臣、総長、天野教授）

同館は、2014年ノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇本学特別教授の研究業績を顕彰するとともに、本学の独創的・先端的な科学技術を推進し、広く社会に貢献することを目的として平成18年に建設されました。1階の展示室では、赤崎特別教授の青色発光ダイオード(LED)の開発に至るまでの道のりや、実際に実験に使用した装置の復元模型などが展示されています。

視察には、2014年ノーベル物理学賞を赤崎特別教授とともに受賞した天野 浩工学研究科教授、濱口総長も同行しました。天野教授から、青色LEDに用いる窒化ガリウムの結晶化装置や窒化ガリウムの結晶模型など、自身が学生時代に実際に用いたときの様子なども踏まえて、展示品や青色LEDに関する研究成果について説明が行われ、下村大臣は時折質問を交えながら熱心に説明に耳を傾けていました。

## 第25回日本数学コンクール及び第18回日本ジュニア数学コンクールを開催

第25回日本数学コンクール及び第18回日本ジュニア数学コンクールが、11月2日(日)、本学をはじめ、大阪・三重・和歌山の4会場において開催されました。毎年8月に開催されていますが、台風による延期のため時期を遅らせての開催となりました。

本コンクールは、小学5年生から高校生を対象として、



問題に取り組む参加者

科学と技術の基盤を担う夢とロマンを秘めた若者の才能を発掘し、育成していくことを目的に開催しています。平成2年から「日本数学コンクール」を、同9年からは「日本ジュニア数学コンクール」を開催しており、平成22年度からは、大学企画として開催しています。

今年度は日本数学コンクールの問題として「キャベツの黄金比」、「曲がったものを真っ直ぐに」の2題、日本ジュニア数学コンクールの問題として「正方形」、「PK戦略」の2題、共通問題として「循環節の長さを指定した循環小数」、「効率のよいテニスの練習を行うためには」の2題が出題され、小・中・高校生141名が、楽しみながら難しい数学の問題に取り組みました。

なお、問題はweb上に掲載されます。(https://www.aip.nagoya-u.ac.jp/event/detail/0000689.html)

審査員により論理性や着眼点などが審査され、12月23日(火・祝)に表彰式が行われる予定です。

## 第46回経営協議会を開催

第46回経営協議会が、10月29日(水)、鶴舞地区の鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からのあいさつの後、人事関係諸制度の見直し及び平成26年度業務達成基準適用事業について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。



会議の様子

次いで、平成25年度に係る業務の実績に関する評価結果、平成27年度概算要求、名古屋大学財務レポート2014、平成26年度国際プログラム群入学試験の結果、クロス・アポイントメント制度、スーパーグローバル大学創成支援プログラム選定結果、名古屋大学基金の状況及び第10回ホームカミングデイについて報告が行われました。

外部委員の方々からは、人事関係諸制度の見直し及び平成27年度概算要求について意見交換が行われ、貴重な意見が寄せられました。

## 支援学生団体 air（あいる）が PEPNet-Japan Award 2014 受賞

本学の障害学生支援室に登録している支援学生団体 air（あいる）が、11月9日(日)、つくば国際会議場にて開催された、第10回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト」において、プレゼンテーション賞を受賞しました。このシンポジウムは、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク



受賞後の記念撮影

(PEPNet-Japan) が主催するものであり、全国の大学や機関に向けての聴覚障害学生支援に関する情報発信や、全国的な支援ネットワークの形成を目的に年1回開催されています。

シンポジウムのメインイベントでもある、「実践事例コンテスト」は大学での聴覚障害のある学生に対する支援の取り組みを発表するものであり、参加した air の学生達は、本学大学院に所属していた聴覚障害学生らの研究活動支援への取り組みや工夫についてポスター発表を行いました。発表に際しては、聴覚障害のある参加者のために、発表者の発言内容をリアルタイムでパソコンにタイピングし、インターネットを介して文字情報をタブレット端末4台に表示するといった工夫を行いました。発表内容も含め、発表時の工夫と熱心な姿勢を評価されたことが、今回のプレゼンテーション賞受賞に至りました。

平成28年度の「障害者差別解消法」の施行を目前に、障害のある学生への修学及び研究活動への支援の重要性が高まりつつあります。今後も、こうした支援の取り組みを継続・向上させていきます。

# 第51回須賀杯争奪駅伝競走大会及び第50回記念プレート除幕式を開催

第51回須賀杯争奪駅伝競走大会及び第50回記念プレート除幕式が、11月15日(土)、千種区平和公園緑地エリア及び豊田講堂前の第1グリーンベルト(芝生)において開催されました。

この駅伝大会は、本学体育会と豊田工業高等専門学校学生会の共催で毎年行われており、元本学学生部長の



除幕式での記念撮影

故須賀太郎本学名誉教授が豊田工業高等専門学校の初代校長に就任した際、両校のスポーツ振興を図ることを目的として、昭和39年(1964年)に始められた歴史ある大会です。

第1回大会が開催されて以来、第43回大会までは、豊田工業高等専門学校から名古屋大学までの約27kmを6区間に分けて行われていましたが、近年では交通事情等の理由により名古屋市内の公園の周回コース等を利用して開催されており、今回は約200名の学生が参加しました。

今年度はさらに、第50回を記念したプレート除幕式が、駅伝大会と同時進行で挙行されました。第50回記念プレートは、豊田工業高等専門学校と名古屋大学間で駅伝が行われていた当時のゴール付近にあたる第1グリーンベルトに、体育会関係者の寄附により11月に設置され、関係者の多数参加の下、お披露目となりました。

今後記念プレートは、緑豊かなこの場所から、学生自身の手でこの駅伝大会が末永く続けられていくのを温かく見守り続けてくれることでしょう。

# 文部科学省「女性研究者研究活動支援事業(連携型)」に採択される

本学は、平成26年度文部科学省「女性研究者研究活動支援事業(連携型)」に申請し、このたび採択されました。

本事業は、名古屋市立大学、豊橋技術科学大学と連携し、さらに連携企業として、トヨタ自動車、愛知中小企業家同友会、愛知県経営者協会、名古屋市、愛知県の協力を得て、「AICHI女性研究者支援コンソーシアム」を構築し、産学

官連携の下、女性研究リーダーの育成を目指す取り組みを行うものです。

女性研究者の研究力向上を図るため、研究力強化セミナー(英語プレゼン研修、国際雑誌への採択率を高める英語論文作成セミナー等)、英語論文校閲助成、広域メンターシップ、共同研究助成、シーズ・ニーズ・マッチング・フォーラムなどの多様な取り組みを行います。

また、女性研究者の上位職登用に向けた取り組みとして、女性研究者リーダーシップ・プログラム、女性研究者データベース構築、女性上位職事例紹介シンポジウムなどを行います。さらに、ワークライフバランス促進のための取り組みとして、ライフイベント中の女性研究者を対象にした研究支援員制度や介護勉強会を行います。

本事業を通して、これまで各機関で行ってきた女性研究者支援の仕組みを愛知県全域へ発展拡大させるとともに、産学官連携により我が国の未来を切り拓く女性研究者リーダーの育成を目指します。



女性研究者研究活動支援事業実施体制及び連携体制

# 大気中の微粒子の起源と影響について調べる

松見 豊 太陽地球環境研究所教授

## 大気エアロゾルとは？

昨年の冬に中国・北京で大気中に浮遊する微粒子（大気エアロゾルと呼ばれる）が非常に高濃度になったことをきっかけとして、特に直径 $2.5\mu\text{m}$ 以下のエアロゾル粒子（PM2.5）に関する報道を頻繁に見かけるようになりました。では、大気エアロゾルとは一体どういうものなのでしょうか？

大気エアロゾルには、黄砂などの土壌粒子や海面から放出される海塩粒子、花粉などの自然起源の粒子と、自動車や暖房などから放出されるス

粒子などの人為起源の粒子があります。また、植物や人間活動により大気中に放出された気相の有機化合物や硫酸化物、窒素酸化物が大気中での化学反応を経て、蒸気圧の低い物質に変化することで、生成する二次生成粒子もあります。このように、エアロゾルには様々な生成過程が寄与し、様々な化学組成や性質を持ったものが存在します。また、粒子同士がくっついたり、気相成分が取り込まれたり、化学反応が進むなどして、大気中で刻々と変化します。たとえ同じ大きさの粒子が同じだけ存在していても、その中に含まれる化学成分や水への溶けやすさなどの性質の違いにより、健康に及ぼす影響が異なると考えられます。そのため、どのような化学成分や性質を持った粒子が、どこでどれだけ生成し、輸送・変質・除去されていくか、また、どのような粒子が健康や気候変動に影響を及ぼすか、詳しく調べることが必要です。

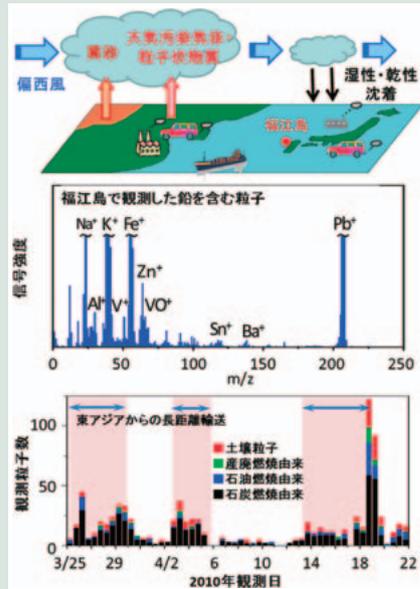


図1 長崎県福江島で観測された鉛を含む粒子の質量スペクトルと、粒子1粒1粒の質量スペクトルに含まれる微量元素成分のパターンから推定した鉛粒子の発生源（土壌、産廃燃焼、重油燃焼および石炭燃焼）の寄与の時間変化。特に大陸から越境輸送された気塊を観測した時に、鉛を含む粒子が増加し、石炭燃焼が主要な排出源となっていることがわかる。

## 日本に飛来するエアロゾルの起源

東アジアから輸送され日本に到達したエアロゾル粒子の起源や変遷過程について調べるため、長崎県の福江島で、独自に開発したレーザーイオン化個別粒子質量分析装置を用いた観測を行いました。この装置は、粒子1粒1粒にレーザー光を照射して気化・イオン化し、生成したイオンを質量分析することで、単一粒子のサイズと、含有化学成分をリアルタイムに測定することができます。我々は、健康影響が懸念される重金属成分の一つである鉛を含む粒子に着目し、同じ粒子中に鉛とともに存在する化学成分の情報を用いて、こういった起源の粒子が飛来しているか調べたところ、観測された鉛含有粒子の半分程度は石炭燃焼

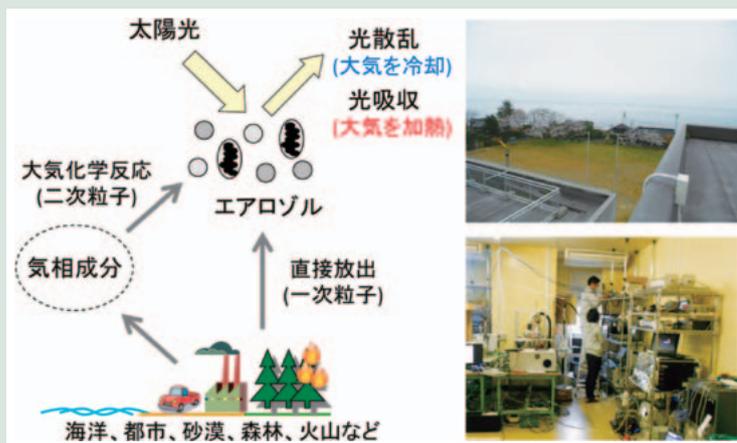


図2 エアロゾルの気候変動への影響(直接効果)の概念図と、金沢大学などと共同で能登半島において行った観測の様子。キャピティリングダウン分光法や光音響分光法などのレーザー分光法を用いて粒子が浮遊した状態で光吸収や光散乱などの光学特性を直接測定し、粒子の化学成分や混合状態が光学特性に及ぼす影響について調べています。

起源で、主に中国大陸から飛来した可能性が高いことが判明しました。また、他にも産業廃棄物や重油の燃焼、鉱物起源の鉛含有粒子が飛来しており、重油燃焼起源の粒子は、主に船舶から排出され、飛来した可能性が高いことが明らかになりました。現在の環境基準では、総量のみしか考慮されていませんが、我々は化学成分も考慮した動態解明を進めることで、エアロゾルが健康や大気環境に及ぼす影響のより詳細な評価を目指しています。

### エアロゾルが大気を加熱・冷却する効果

大気エアロゾルは、太陽光を光散乱もしくは光吸収することにより放射収支を変化させ、気候変動にも影響を及ぼしています。強い光吸収性を有する黒色のスス粒子は、二酸化炭素に次いで大きな放射強制力を持つと考えられています。従来、

蒸気圧の低い有機化合物を主成分とする有機エアロゾルは光吸収性をほとんど持たないと考えられていましたが、近年、一部の有機エアロゾルが光吸収性を有することがわかってきました。我々は、実験室内で、大気中でのエアロゾル生成過程を再現し、生成した粒子の光学特性を詳細に調べています。その結果、代表的な植物起源の有機化合物であるアルファピネンの酸化により生成した有機エアロゾルは光吸収性を持たないのに対し、代表的な人為起源の有機化合物であるトルエンの酸化により生成した有機エアロゾルは短波長可視から紫外領域で光吸収性を有することを初めて明らかにしました。また、名古屋市内や紀伊山地、能登半島で大気観測を行い、都市や森林、アジア大陸から輸送された気塊など、様々な環境下で存在するエアロゾルが有する大気加熱/冷却効果について明らかにすることを目指しています。

福岡県北九州市生まれ。1976年東京工業大学理学部化学科卒、同理工学研究所博士後期課程化学専攻修了、理学博士。1988年北海道大学応用電気研究所講師、同助教授を経て、1997年に名古屋大学太陽地球環境研究所教授。2009年同研究所所長になり、現在に至る。専門は物理化学分野の素反応ダイナミクスの研究から、大気環境の反応過程、大気環境の計測装置の開発およびフィールド計測と変遷してきた。趣味は、ハンダゴテを握った電気工作と機械工作で実験・観測装置を作ることだが、最近はその時間が取れないのがさびしい。

まつみ ゆたか



# 社会的ネットワークの「つながり」を科学する

人間のこころと同様に、人々の間のつながりは目に見えないものです。日々の生活の中で、他者とのつながり、すなわち社会的ネットワークをどのようにして形成し、維持していくか、さらにどのようにしてその構造を把握するかは、私たちの社会活動を支える上で必要不可欠な要素だといえます。

私たちの研究室では、社会的ネットワークの形成や維持、把握に関係するところの仕組みを明らかにするために、社会心理学的アプローチを用いた多面的な検討を行っています。これまで、他者一般に対する信頼を持つことが、社会的ネットワークにおける対人選択行動とどのように関連するのかについて、縦断調査に基づいて検討を行いました(五十嵐(2010))。集団成員の入れ替わりがない状況において、信頼の高い個人は、やみくもに社会的ネットワークを拡張することはせず、自分と同様に信頼の高い他者を友人として選択していました(図1)。このことは、社会的ネットワークの構造が、信頼の高い人々の集団とそうでない集団に分断化される可能性を示しています。

また、社会的ネットワークのつながりをもと

に、人々の集まりを実体のある集団として判断する「集団らしさ」の基準についても検討を行いました(Igarashi & Kashima, 2011)。5人以下の人々の集まりは、相互のつながりが緊密な場合に「集団らしい」とみなされていたのに対し、10人以上の人々の集まりは、つながりが密でない場合にも「集団らしい」とみなされていました(図2)。このことは、私たちが人々の集まりに対し、つながりのパターンに関する経験的なプロトタイプ(典型例)を用いて、「集団らしさ」の判断を行っていることを示しています。

他にも、非意識的なプロセス、動機づけ、感情、学習方略といったさまざまな心理的なメカニズムが、社会的ネットワークにおける人々のふるまいに影響を与える可能性があります。現代を生きる私たちにとって、社会的ネットワークとどのように向き合っていくかは、インターネットやソーシャルメディアの活用、地域コミュニティにおける絆の位置づけといった、さまざまな社会問題を考える上でも、今後ますます重要な課題となっていくでしょう

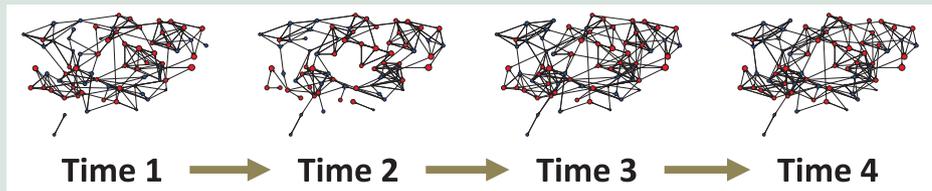


図1 社会的ネットワークにおける対人選択と信頼。時間の経過に伴い、高信頼者同士(●●)が選択的に関係を形成している。

五十嵐(2010)。高信頼者の対人関係選択のダイナミクス：行為者指向型ネットワーク選択モデルによる「見極め」能力の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第57回大会

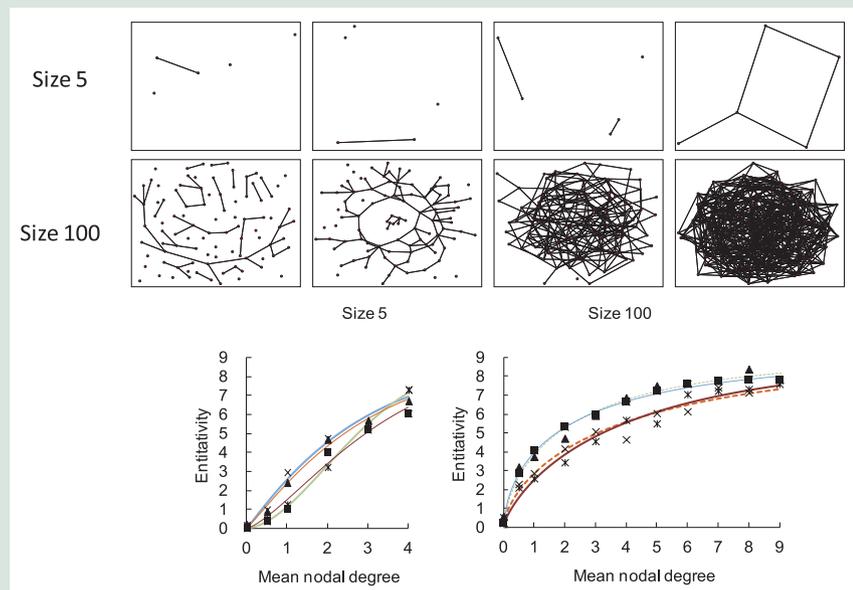


図2 社会的ネットワークにおける「つながり」の密度と「集団らしさ」の知覚。サイズの大きい集団は、つながりが密でない場合にも集団らしいと知覚される。

Igarashi, T., & Kashima, Y. (2011). Perceived entitativity of social networks. *Journal of Experimental Social Psychology, 47*, 1048-1058.

# 医学系研究科医系研究棟3号館竣工及び鶴舞キャンパス100周年記念式典を挙行

●大学院医学系研究科



来賓あいさつする加藤元総長

大学院医学系研究科は、11月13日(木)、医学部附属病院中央診療棟3階講堂において医系研究棟3号館竣工及び鶴舞キャンパス移転100周年記念式典を挙行了しました。

この式典は、新たに医系研究棟3号館が竣工したこと、医学部の前身である愛知県立医学専門学校及び愛知県立愛知病院が1914(大正3)年に鶴舞キャンパスに移転して100周年を迎えることを記念して開催されたもので、加藤延夫元本学総長をはじめとして、寺門成真文部科学省高等教育局医学教育課長、森政之文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課整備計画室長のほか、医系研究棟3号館の建設に際しご寄附をいただいた方々や本学名誉教授、濱口総長、高橋医学系研究科長などの大学関係者など、約170名が出席しました。

はじめに総長及び高橋研究科長からあいさつがあり、続いて、加藤元総長、寺門医学教育課長、森整備計画室長から来賓あいさつがありました。寺門医学教育課長からは、「これまで築いてこられた伝統と実績を基に、更に充実した教育・研究環境に取り組み、我が国の医学医療の拠点

としての役割を果たされると確信しております」と、同研究科への期待が述べられました。

その後、門松同研究科副研究科長から医系研究棟3号館の施設概要について説明があった後、高橋昭本学名誉教授が「名古屋大学医学部の歩み」と題して、歴史的な背景を踏まえつつ鶴舞キャンパス移転100周年について説明が行われ、最後に石黒医学部附属病院長から閉会のあいさつがありました。

引き続き行われた医系研究棟3号館の内覧会では、全国有数の規模を誇る大解剖実習室、最新の研究機器を揃えた附属医学教育研究支援センター分析機器部門、先端・先進医療開発の拠点である先端医療・臨床研究支援センターの見学が行われました。これら3施設のほか、医系研究棟3号館には、産学連携による研究の促進が期待される寄附講座や産学協同研究講座、研究者間での活発なコミュニケーションを誘発し、知的創造性を育むためのライブラリと呼ばれるスペースが設けられています。地上10階、地下1階建ての建物は、鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄骨造で、延床面積は13,088m<sup>2</sup>におよびます。全館LED照明を採用しているほか、外壁面は高断熱・高气密化を図り、南北の窓面には複層ガラスを採用、日射の影響が大きい東西面は、窓面積を小さくし、遮熱フィルムを採用することにより日射遮蔽効果が高められています。

同研究科では、医系研究棟3号館が竣工したことにより、これまで以上に充実した研究・教育・学習の環境が整備され、また鶴舞キャンパスへの移転後100年という節目を迎え、今後更なる教育研究の進展や社会貢献への充実が図られることが期待されます。



来賓あいさつする寺門医学教育課長

# 「国連デー記念イベント at Nagoya University」を開催

●大学院国際開発研究科、博士課程教育リーディングプログラム『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』

大学院国際開発研究科及び博士課程教育リーディングプログラム『ウェルビーイング in アジア』実現のための女性リーダー育成プログラム』は、10月21日(火)、国際学術コンソーシアム (AC21) の協賛により、ES 総合館において、「国連デー記念イベント at Nagoya University ～ウェルビーイングの実現に向けて私たちができること～」を開催しました。1945年10月24日の国連憲章発効を記念して毎年10月24日の「国連デー」には様々なイベントが世界中で開催されていますが、今年は、「国連アカデミック・インパクト」のパートナー団体 AC21 の事務局がある本学で、学生主体の企画・運営によりイベントが開催されました。近隣の大学・高校や一般の参加者等約240名が参加し大盛況となりました。

濱口総長による歓迎の辞、伊東国際開発研究科長による主催者あいさつに続き、平田純一文部科学省大臣官房国際課専門官による来賓あいさつに続いて、岡田亜弥国際開発研究科教授による趣旨説明が行われた後、根本かおる国連広報センター長による「ジェンダー平等を自分事に！」と



パネルディスカッションでの討論の様子

題する基調講演が行われました。続いて「ジェンダーお国事情」のセッションでは、18カ国の学生たちが壇上で自国のジェンダー事情に関する質問に答え、続く学生討論のセッションでは、「男女平等を達成するために、性別の割当を定めるべきか？」をテーマに、賛成と反対の2グループに分かれ、白熱した討論が行われました。パネルディスカッションでは、メヘル・カーン・ウィリアムズ元国連事務次長補・国連人権高等弁務官事務所副弁務官、佐崎淳子国連人口基金東京事務所長、ムブリ・チャールズ・ポリコ国連食糧農業機関駐日連絡事務所長、高瀬千賀子国連地域開発センター所長の4名をパネリストとして、「ウェルビーイングの実現に向けて私たちができること」をテーマに発表と討論が行われました。渡辺理事による閉会あいさつの後、日本やタイ、カンボジア、インドネシアの学生による「クロスカルチュラル・パフォーマンス・ショー」が催されました。



記念撮影



討論セッションの様子

## 3カ国教育大臣らが教育学部と附属学校を訪問

### ●教育学部

ホンジュラス教育大臣、ミャンマー教育副大臣、ヤンゴン外国語大学長、ネパール教育大臣、ネパール教育省ノンフォーマル教育センター所長らの視察団が、独立行政法人国際協力機構（JICA）の仲介により、11月13日（木）、教育学部と附属中・高等学校を訪問・視察しました。今回の視察は、11月10日（月）から12日（水）の間開催された「持続



3カ国教育大臣らへの教育学部からの説明

可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」の出席のため名古屋市を訪れたことにより実現しました。

訪問の目的は、大学における附属学校の機能と意義についての情報収集です。会合では、本学関係者と附属学校関係者の出席のほか、大学初年次科目である基礎セミナーの受講や、モンゴルプロジェクト、ニューヨークプロジェクトへの参加など、大学と附属学校との連携事業に参加してきた附属高校3年生3名も同席しました。

教育学部からは、同学部・研究科と附属学校についての説明を行い、附属学校からは、スーパー・サイエンス・ハイスクールや大学との連携事業についての紹介を行いました。これらについて、各国の教育大臣側からはいくつもの専門的な質問が出され、それについて熱心なやりとりが交わされました。その後、各大臣から生徒たちに質問がなされるとともに、最後には、日本の高校生への期待が述べられ、大変和やかな雰囲気の中、会合は終了しました。各国大臣らは、収集した情報をもとに早速本国に調査等を指示するなど、今回の訪問に意義を感じている様子でした。

## 第9回名大病院市民公開講座を開催

### ●医学部附属病院

医学部附属病院は、10月26日（日）、名古屋市中区役所ホールにおいて、第9回名大病院市民公開講座を開催しました。

この公開講座は、治験を市民の方に広く知ってもらう機会として平成20年から開催されており、昨年に引き続き、厚生労働省の臨床研究中核病院整備事業の一環として行わ



講演する長谷川副病院長

れました。

長谷川同院副病院長から開会のあいさつの後、「あなたの肺は大丈夫？ - COPD（慢性閉塞性肺疾患）-」と題し、講演が行われました。死亡原因として増加している COPD の予防の啓発として、自己チェックを行った後、そのメカニズムやたばこによる影響について説明がありました。次に、野田幸裕名城大学薬学部教授から、「くすりとのお上手なつきあい方」と題した、薬にまつわる疑問や飲みあわせの注意点等、安全な使用に関する講演が行われました。続いて、清水 忍医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター病院講師から「薬が承認されるまで」と題して、くすりの開発の流れとともに、日本での審査方法及び開発状況についての講演が行われました。

最後に、水野正明医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター副センター長による閉会のあいさつで終了しました。

当日は約300名の市民が参加し、講演に熱心に耳を傾けるとともに、薬の服用や喫煙に関する日頃の疑問点について活発な質疑応答もあり、盛況のうちに終了しました。

## 名古屋－延世大学間学術研究交流会2014を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、11月2日(日)から4日(火)の間、大幸キャンパスにおいて、名古屋－延世大学間学術研究交流会2014を開催しました。この交流会は同研究科が5年前から延世大学校と大学院レベルでの学術研究交流を目指して始まり、第1回を本学で開催して以降、毎年両大学で交互に開催しています。今年は、延世大学校から教員・



開会式典での記念撮影

大学院生28名を迎え、本学からは大学院生・教員など200名以上が参加し活発な交流が行われました。

学術研究交流会では、最初の開会式典で、榊原保健学統括専攻長、高橋医学系研究科長、ヒー・ジョン・キム延世大学校教授からあいさつ及び大学紹介がありました。次いで、これまでの交流成果に基づいて、保健学分野の部局間交流協定の締結が行われ、両部局の代表が署名を行い今後の交流継続を確認しました。その後、5分科会（看護学、放射線技術学、検査技術学、理学療法学、作業療法学）に分かれて47題の研究発表が行われ、夜には専攻別の交流会が開かれました。さらに延世大学校の大学院生10名は、6日(木)まで本学に滞在して、各専攻の研究室を訪問し研究交流を一層深めました。なお、本学からも大学院生10名が延世大学校の研究室を訪問する予定になっています。

今回は5回目の開催とあり、両大学間の友好関係も深まり、大学院生の国際交流への意欲向上とともに、緊密な人材交流が図られてきています。また同交流会は、平成23年度より文部科学省海外留学支援制度の支援を受けて実施しています。

## 「国際機関合同アウトリーチミッション」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、10月21日(火)、ES総合館ESホールにおいて、国際機関への就職希望者を対象とする合同就職説明会「国際機関合同アウトリーチミッション」を開催しました。これは、外務省国際機関人事センター・国連事務局との共催で行われ、日本人の国際機関への就職を促進するための活動として昨年東京で初めて実



国連機関担当者によるプレゼンテーションと会場の様子

施され、今年は関西圏の4大学と中部圏では初となる本学で開催されました。国連事務局に加え、国連開発計画(UNDP)、国連児童基金(UNICEF)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、国連人口基金(UNFPA)、経済協力開発機構(OECD)の6つの国際機関より人事担当者が揃って来学しました。同日、開催した「国連デー at Nagoya University」に続く夕方からの開催でしたが、学内外から学生・社会人など約200名の参加があり、会場は満席で立ち見が出るほど大盛況でした。

まず、濱口総長の歓迎の辞に続き、阿部 智外務省国際機関人事センター室長による主催者あいさつが行われ、続いて、ジョン・エリクソン国連事務局人的資源管理部アウトリーチユニットチーフによる全体説明が行われました。その後、マリ・ベソネンUNDP人事担当官、ロッセラ・サルビアUNESCO人事担当官、マイケル・エメリーUNFPA本部人事部長など、各機関の人事担当者から業務内容や就職機会について説明が行われました。後半は、別室で、各機関担当者との個別相談が行われ、参加者の列が途絶えないほど盛況で、国際機関への就職に対する関心の高さがうかがえました。

## 国際シンポジウム「多数のハザードをまとめて考える」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、10月24日(金)、環境総合館において、国際シンポジウム「多数のハザードをまとめて考える」を開催しました。これは、主催者である篠田雅人環境学研究科教授が研究代表者となっている通称「4Dプロジェクト(科研費基盤研究(S)「乾燥地災害学の体系化」)」の成果発表会でもあり、発表は、口頭が5件、ポスターが



ポスター発表の様子

29件で、筆頭発表者は、日本人21名、モンゴル人6名、中国人5名、アメリカ人1名と多様な背景の研究者が参加しました。

災害多発国である日本では、「火山噴火により噴出した岩石や火山灰が堆積し、直後に襲来した台風の大雨により土石流や泥流が発生し、下流の地域を襲う」という複数のハザード(災害につながる原因)による災害発生シナリオは十分に考えられます。本シンポジウムは、このような発想のもと、ハザードの種類は異なりますが、乾燥地にあるモンゴルの多様なハザードについて、災害研究者と地域研究者が集まり、考える機会としました。

シンポジウムで特に注目した点は、モンゴルで2009年、2010年の冬に発生したゾド(モンゴル語で寒雪害の意)と他のハザード(干ばつ・砂塵嵐・砂漠化)との関連であり、これらのハザードをまとめて考えることの有効性を検討しました。このゾドではモンゴル国内の家畜の4分の1が死に、国内経済や公衆衛生に深刻な影響をおよぼしました。最後に行われたパネル・ディスカッションでは、シンポジウムの議論を今後どのように現場の災害管理に役立てていくかという点について考えを深めました。

## 減災館第1回特別企画展を開催

●減災連携研究センター

減災館では、9月2日(火)から10月18日(土)までの間、第1回特別企画展「伊勢湾台風ー日本の防災の幕開けー」を開催しました。1959年に発生した伊勢湾台風は、第二次世界大戦後の高度経済成長期にある日本を直撃した災害でした。被害は、愛知県、岐阜県、三重県におよび、高潮に伴う破堤により、被災地は2カ月近く冠水し、大きな被害



自分の街の被害の様子をみつめる来館者

を受けました。伊勢湾台風の経験は、「防災」の重要性を意識させ、その復興過程においては、「災害対策基本法」をはじめ、減災の日本の災害対策の礎となる制度が構築されました。また、土木工学研究を推進するため、1961年4月1日に本学工学部に土木工学科が新設されました。

展示では、当時の最先端の技術を活用して撮影された空撮写真、一刻も早い復旧に向けて尽力した行政や、中部電力、東邦ガスなどのライフライン企業の取り組みなど、伊勢湾台風がきっかけとなり新たに構築された日本の防災の取り組みを紹介しました。また、開催に際して、中部地区自然災害科学資料センター所蔵資料、東海市の市民の方による浸水被害を伝える資料、伊勢湾台風の復興住宅など、様々な方から資料提供を受けました。展示と併せて「げんさいカフェ」や展示を使ったミニ防災レクチャー「ギャラリートーク」を開催しました。来館者からは「忘れていた当時の情景を思いだした。経験を伝えなければならぬと感じた」などの感想が寄せられました。

## ナショナルコンポジットセンター連携協定締結記念イベントを開催

### ●ナショナルコンポジットセンター

ナショナルコンポジットセンターは、11月12日(水)、豊田講堂において、「東海・北陸連携コンポジットハイウェイ構想キックオフ記念式典及び記念講演会」を開催しました。これは、同センターと岐阜大学複合材料研究センター、金沢工業大学革新複合材料研究センターが合同で、次世代先進材料として期待される新たな炭素繊維複合材料の開発



調印後の様子（左から、鶴澤所長、石川センター長、三宅センター長）

に向けた協定締結等のため開催されました。

記念式典では、松下工学研究科長の開会の辞の後、松尾副総長、谷本正憲石川県知事、大村秀章愛知県知事など主催者等からあいさつ、次いで、川上伸昭文部科学省科学技術・学術政策局長、内山田竹志トヨタ自動車株式会社代表取締役会長ほか多数の来賓から祝辞がありました。その後石川同センター長、三宅卓志複合材料研究センター長及び鶴澤 潔革新複合材料研究開発センター所長が協定書に調印しました。

3大学の連携は、北陸地区と東海地区が得意分野を補い合い、複合材の研究開発から生産、加工、組み立てまでを行える産業集積の形成や、共同研究や研究者の交流を加速し、産業界のニーズに応えた複合材の開発に繋げる「東海・北陸連携コンポジットハイウェイ構想」を推進させて、世界をリードする複合材の一大拠点化を目指しています。

記念講演会では、吉永 稔東レ株式会社取締役、梅村 晋トヨタ自動車株式会社材料技術領域材料技術統括室長及びコンポジット材料に関するドイツのクラスター機関 CFK Valley Stade のアクセル・ヘルマン博士の3名からそれぞれ講演がありました。記念式典・記念講演会へは、学内外から約480名が参加し、大盛況のうちに閉会しました。

## ヨゼフ・ステファン研究所との学術交流協定を締結

### ●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構（KMI）は、11月7日(金)スロベニア共和国のヨゼフ・ステファン研究所との間で学術交流協定を締結し、本学で署名式が行われました。

署名式には、スロベニア共和国のヘレナ・ドルノウシュク・ゾルコ駐日大使も同席し、同研究所のピーター・クリザン教授と KMI 機構長である益川敏英本学特別教授が協定書

に署名を交わしました。ピーター・クリザン教授は、飯嶋 KMI 現象解析研究センター長らとともに、本学の研究大学強化促進事業「重フレーバー素粒子物理学国際研究ユニット」を推進しており、今後、両研究所間の活発な研究交流が期待されます。

ゾルコ駐日大使は署名式後、山本理事や益川特別教授らと、今後の共同研究や学術交流について歓談しました。また、ノーベル賞展示室等を訪れ、坂田・平田スクールや、小林・益川両博士と下村博士による研究の歴史を興味深く見学しました。

なお、署名式には、野尻伸一 KMI 基礎理論研究センター長、重フレーバー素粒子物理学国際研究ユニットの久野純治理学研究科教授及び同ユニットの戸本 誠 KMI 准教授も同席しました。



記念撮影

## 2014年秋季特別展を開催

●附属図書館



展示を見学する来場者

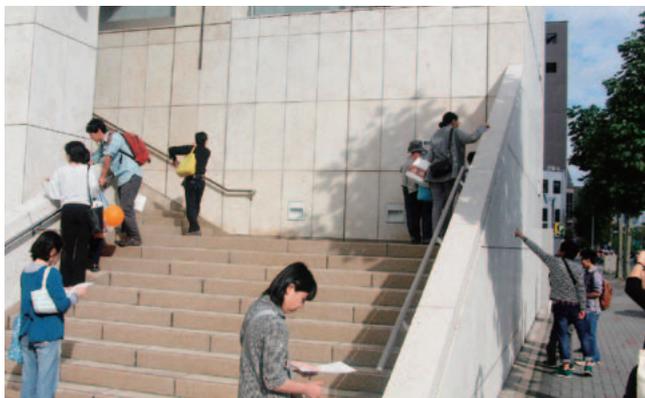
附属図書館及び同研究開発室は、10月18日(土)から11月6日(木)までの間、2014年秋季特別展「時を超える贈り物ー所蔵資料が語る学びの世界ー」を開催しました。一般市民や本学の卒業生等約450名の来場がありました。

今回の展示会では、本学が所蔵する資料のうち、「学び」をテーマに、寺子屋で手習いや読み書きに使われた資料や、明治、大正時代に学校で教材として使われた掛け図や教科書、秘伝書や指南書、外国からの知識の受容など、先人達の「学び」に対する姿勢を示す資料を4つのパートに分けて紹介しました。また、体験コーナーとして、展示にも用いた、江戸時代の連鶴の折り方を紹介した資料『秘伝千羽鶴折形』の中から2種類を選び、実際に2羽、3羽とつながった鶴を折ることができるコーナーを設けました。

来場者からは、「大学にこのような資料があるとは知らなかった」、「昔の学びの様子がよくわかった」、「折り鶴が楽しかった」などの声が寄せられ、好評のうちに終了しました。

## 第3回地球教室を開催

●博物館



築周辺において石灰岩に含まれる化石を観察する参加者の様子

博物館は、10月25日(土)、26日(日)の両日、今年度3回目となるフィールドセミナー地球教室「ナゴヤで化石をさがそう！」を開催しました。今回は、小中学生や一般の方、計24名が参加し、名古屋市内の建築物の石材に含まれる化石の見学を行いました。1日目は、同館において岩石や化石の種類に関する講義を行った後、建材としてカットされた岩石の表面に化石がどのように表れるかを知るために、現生の貝を切断してできた断面を観察しました。この予習を踏まえ、2日目は名古屋駅と栄周辺に出かけ、壁や柱に用いられている石材からさまざまな化石の発見・観察を行いました。この地域は改築が多いため、毎年、「化石スポット」の情報更新をしています。通勤など普段の生活でみられた場所にも、意外な自然が隠されていたことに参加者は驚きながら、大変興味深く化石を観察していました。なお、この事業は名古屋市科学館との協定事業で、愛知大学名古屋一般教育研究室的の援助を受けています。

## 第104回防災アカデミー開催

●減災連携研究センター



講演する柳川氏

減災連携研究センターは、10月23日(木)、減災館において第104回防災アカデミーを開催しました。今回は元NHK解説委員の柳川喜郎氏により「100年前の桜島噴火災害に学ぶ」というタイトルで講演が行われ、90名が参加しました。講演では、大規模地震対策特別措置法の制定を契機として災害情報の伝達と利用について考える中で、1914年の大正桜島噴火の事例にたどりついたことや、曖昧な災害情報の扱いを誤ったために悲劇がもたらされ、「科学不信の碑」とも言われる桜島爆発記念碑が建立された経緯などについて、30年以上前に行われた取材を振り返る形で生き生きと語られました。こうした災害情報の扱いの難しさは最近発生した御嶽山の噴火にもつながるものであり、災害教訓を受け継ぎ生かすことの重要性と難しさが改めて浮き彫りになりました。講演は、多数の火山を抱える日本として監視体制の整備の重要性を訴えて締めくくられました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 第10回名古屋大学ホームカミングデイ開催:18日 2014年ノーベル物理学賞受賞者天野 浩工学研究科教授が登壇してあいさつを行う	10.16 (木)	中日 (朝刊)
2 2014年ノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授を祝う横断幕が豊田合成株式会社本社をはじめ国内8拠点に掲げられた	10.16 (木)	中日 (朝刊)
3 未来照らす「光」に脚光 ノーベル物理学賞 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授	10.16 (木)	朝日 (朝刊)
4 ノーベル賞自然科学部門 社会を変えた独創に栄誉 物理学賞 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授	10.16 (木)	毎日 (朝刊)
5 読売新聞講座「新時代の宇宙競走」開催:15日 読売新聞東京本社論説委員が法学研究科留学生約30人に講義	10.16 (木)	読売
6 名古屋市長河村たかし氏が導入を公約した「地域委員会」に関して、中田 實本学名誉教授がつくる研究会が既存の住民自治組織と連携するための仕組み作りなどを求める提言を提出	10.16 (木)	毎日 (朝刊)
7 国連事務局と外務省は国連機関での就職を希望する学生らを対象とした職員採用説明会を ES 総合館で21日開催	10.16 (木) 10.17 (金) 10.21 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
8 福和伸夫減災連携研究センター教授が委員を務める愛知県と名古屋市の「国土強靱化地域計画」づくりに向けた第1回有識者懇談会が開かれた	10.17 (金)	日経 (朝刊) 読売
9 神奈川大学教授上村大輔本学名誉教授が体の細胞にたまった脂肪を減らす新しい化合物を発見	10.17 (金)	中日 (朝刊)
10 中日文化センター講座「水の危機 地球環境のフロンティア」: 檜山哲哉地球水循環研究センター教授	10.17 (金)	中日 (夕刊)
11 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授が2014年度ノーベル物理学賞を受賞	10.17 (金)	科学新聞
12 2014年度ノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授への角界からお祝いメッセージ	10.17 (金)	科学新聞
13 松林嘉克理学研究科教授は植物の根における窒素栄養取り込み量を制御するホルモンを発見	10.17 (金) 10.18 (土)	中日 (朝刊) 他2社 毎日 (朝刊) 日経 (夕刊)
14 文部科学省は御嶽山で発生した水蒸気噴火に関する総合調査のため山岡耕春環境学研究科教授に科学研究費補助金の交付を決定	10.17 (金) 10.18 (土) 10.20 (月) 10.31 (金)	日経 (夕刊) 毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日刊工業 科学新聞
15 ニュースがっせん:日本の3人にノーベル賞 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授	10.18 (土)	中日 (朝刊)
16 この人:対話する石彫を手掛ける 本学博物館で特別展「絹谷幸太 創知彫刻」が開催中の絹谷幸太氏	10.18 (土)	中日 (朝刊)
17 国連デー記念イベント at Nagoya University「ウェルビーイングの実現に向けて私たちができること開催」:21日	10.18 (土) 10.22 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 読売
18 第10回名古屋大学ホームカミングデイ開催:18日 天野 浩工学研究科教授は卒業生などが集う会に登場し全学同窓会会長豊田章一郎氏から祝福を受けた	10.19 (日)	朝日 (朝刊) 他4社
19 本学の野依記念物質科学研究館から赤崎記念研究館まで「ノーベルロード」が作られる計画が浮上していると報じられる	10.19 (日)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
20 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催:18日 益川敏英本学特別教授と下村 脩同特別教授が名古屋国際会議場で講演し、今年のノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇同特別教授と天野 浩工学研究科教授からはメッセージが届いた	10.19 (日) 11.13 (木)	読売 読売
21 レーザー:打率“5割” 濱口総長が21世紀に入り、日本から輩出された12人のノーベル賞受賞者のうち、「6人は名大関係者」と語る	10.20 (月)	日刊工業
22 愛知県は赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授に県学術顕彰を贈ると発表	10.20 (月) 10.21 (火)	日経 (夕刊) 毎日 (夕刊) 中日 (朝刊) 読売
23 2014年度ノーベル物理学賞受賞者赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授と野依良治同特別教授が本学で鼎談	10.21 (火)	中日 (朝刊)
24 時事英語に挑戦 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞したニュースが題材に取り上げられる	10.21 (火)	朝日 (朝刊)
25 安城市立図書館に書籍「青い光に魅せられて～青色LED開発物語」赤崎 勇本学特別教授著などのノーベル賞関連の図書を集めた一角が設けられた	10.21 (火)	毎日 (朝刊)
26 のよりサロン:「創造性を育む」研究以外の時間にチャンス 野依良治本学特別教授が本学学生と議論を交わす	10.21 (火)	中日 (朝刊)
27 本学は人工筋肉の研究でよく伸び縮みする新素材を開発	10.21 (火)	日経 (朝刊)
28 いまドキッ!大学生:使ってる?カーシェア 森川高行未来社会創造機構教授は「そもそも学生の車への関心が薄れている」と語る	10.21 (火)	中日 (朝刊)
29 数理ウェブ:25日 大澤健夫多元数理科学研究科教授が「大学への数学」、伊師英之同准教授が「トランプのシャッフルの話」をテーマに講演	10.21 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
30 国連事務局と外務省は国連機関での就職を希望する学生らを対象とした職員採用説明会を ES 総合館で21日に開催した	10.22 (水) 10.24 (金)	読売 中日 (朝刊)
31 本学の次期総長選で松尾清一医学系研究科教授が過半数を得票したと報じられる	10.22 (水)	中日 (朝刊)
32 第10回東海地区分離技術講演会開催：27日 椿 淳一郎本学名誉教授が講演	10.22 (水)	日刊工業
33 第4回花祭 (はなまつり) の保存・伝承と地域連携開催：25日 本学の9人が語りあう	10.22 (水)	毎日 (朝刊)
34 天野 浩工学研究科教授が下村博文文部科学相と面会し「(受賞について) 自由に研究できる環境がよかった」と語る	10.22 (水) 10.23 (木)	朝日 (夕刊) 他3社 読売 他2社
35 天野 浩工学研究科教授が安倍晋三首相と会談し「(LEDが世界に) 広がったのはたくさんの方の努力によるものだ」と語る	10.23 (木)	日経 (朝刊) 他4社
36 名古屋からノーベル賞 3氏が語る 2001年化学賞 野依良治本学特別教授、2014年物理学賞赤崎 勇特別教授、天野 浩工学研究科教授	10.23 (木)	中日 (朝刊)
37 ノーベル物理学賞 青色 LED 開発の3氏に 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授	10.23 (木)	日刊工業 毎日 (朝刊)
38 読売新聞講座「1つの言葉で対話するアジア」開催：22日 読売新聞東京本社英字新聞部次長が留学生約30人に講義	10.23 (木)	読売
39 秋の園遊会招待者 佐藤健一工学研究科教授	10.23 (木)	読売
40 10月23日は化学の日 公益社団法人日本化学会会長榊原定征氏本学卒業生	10.23 (木)	読売
41 スーパーグローバル大学「国が格付け」の波紋 本学がトップ型に採択されたことが取り上げられる	10.23 (木) 10.25 (土)	毎日 (夕刊) 読売
42 名古屋大学 アジアで博士育成 瀧口総長はアジアサテライトキャンパスについて「10年後には、50人の副大臣、局長クラスの人たちを育て上げたい」と語る	10.24 (金)	朝日 (朝刊)
43 法学研究科と十六銀行の相互協力の一環で十六銀行は「じゅうろくアジア留学生奨学金」を創設し、留学生に奨学金を授与	10.24 (金)	日経 (朝刊)
44 火山噴火予知連絡会が御嶽山の火口から4キロ以内での調査も視野に、山岡耕春環境学研究科教授を班長とする総合観測班を設けることを了承	10.24 (金)	毎日 (朝刊)
45 小児がんの患者を支えるネットワーク 小児がん拠点病院 医学部附属病院	10.24 (金)	朝日 (朝刊)
46 2014年文化勲章、文化功労者を天野 浩工学研究科教授に、文化功労者を法政大学名誉教授小池和男氏元本学教授に贈られることが決定	10.24 (金) 10.25 (土) 10.31 (金)	中日 (夕刊) 他3社 読売 他3社 科学新聞
47 文化勲章の受賞が決まった天野 浩工学研究科教授の会見が本学で行われた	10.25 (土)	毎日 (朝刊) 他3社
48 なばなの里ウィンターイルミネーション「冬華(とうか)の競演」の内覧会が行われ、赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授が青色 LED でノーベル賞を受賞した特別な年になったと取り上げられる	10.25 (土)	日経 (朝刊)
49 広がる理・工学の世界 名古屋大学 伊丹健一郎トランスフォーメティブ生命分子研究所教授	10.25 (土)	朝日 (朝刊)
50 ESD みーつけた①：名古屋テレビ塔 LED 照らす地球の未来 地元の赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授がノーベル賞を受賞したことが取り上げられる	10.26 (日)	中日 (朝刊)
51 山岡耕春環境学研究科教授は御嶽山の火山活動について「御嶽山では現在、めだつた地殻変動はなく、今のところ、マグマ噴火に移行する可能性は低い」と語る	10.26 (日)	読売
52 第4回花祭 (はなまつり) の保存・伝承と地域連携開催：25日 本学で行われた	10.26 (日)	毎日 (朝刊)
53 いちからわかる！：最近のノーベル賞受賞者名大ゆかりの人が多い？ 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授で計6人	10.27 (月)	朝日 (朝刊)
54 産業春秋：赤崎 勇本学特別教授と豊田合成株式会社との研究が産学連携の成功事例として取り上げられる	10.27 (月)	日刊工業
55 木股文昭元本学教授は御嶽山の噴火について「79年の噴火は10月28日で時期が遅く、登山者が少なかった」と語る	10.27 (月)	朝日 (朝刊)
56 インタビュールーム：脱原発応援弁護団代表 弁護士北村 栄氏本学卒業生	10.27 (月)	毎日 (朝刊)
57 御嶽山について本学を中心とした「オールジャパン」の研究班が組織され、マグマ噴火への移行も視野に調査を進めていると報じられる	10.28 (火)	毎日 (朝刊)
58 紙野健二法学研究科教授は名古屋市長河村たかし氏が市の財産として古い建物の解体を保留していることについて「貴重な建物を保存したいなら、支援制度を条例で定めるなどして根本的に取り組むべきだ」と語る	10.28 (火)	朝日 (朝刊)
59 中日新聞「リンクト」：HUMAN'S EYE 松尾清一医学系研究科教授 医学の進歩と利用する知恵	10.29 (水)	中日 (朝刊)
60 解説スペシャル：人口減対策 注目の農村 生源寺真一生命農学研究科教授は日本農業の活路について「付加価値を高める取り組みで農業経営の厚みを増すこと」と語る	10.29 (水)	読売
61 経済学部生に向け名古屋国税局局長村中健一氏が「税の役割と税務署の仕事」をテーマに講演	10.29 (水)	日経 (朝刊) 他2社
62 次期総長に選出された松尾清一医学系研究科教授は「若手研究者を支援し、花開くようにしたい」と語る	10.30 (木)	毎日 (朝刊) 他5社

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
63 顔：国際数学連合の総裁に就任する京都大学教授森 重文本学特別教授	10.30 (木)	読売
64 本学で南海トラフ大地震を想定した避難訓練が行われ、約1万人の学生と教職員が参加	10.30 (木)	毎日 (朝刊)
65 減災館の来館者が1万人に達し福和伸夫減災連携研究センター教授は「来館者が具体的な取り組みを实践できるように今後も継続していきたい」と語る	10.30 (木)	朝日 (朝刊)
66 御嶽山噴火から1ヶ月：研究者不足に危機感 御嶽山の観測は本学が担ってきたが、木股文昭元本学教授が12年に退職したと報じられる	10.30 (木)	毎日 (朝刊)
67 読売新聞講座「地政学でみる日本とアジアの安全保障」開催：29日 読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員 笹島雅彦氏が留学生らに講義	10.30 (木)	読売
68 関西発：生徒導く 青い灯火 赤崎 勇本学特別教授が京都市の西京中学・高校で講演をしたのが縁で寄贈した青色LEDのオブジェが紹介される	10.30 (木)	中日 (夕刊)
69 岡田 俊医学部附属病院准教授や東京大学などのグループは自閉スペクトラム症へのオキシトシン経鼻スプレーの治療効果を検証する臨床試験を開始すると発表	10.31 (金) 11. 1 (土) 11. 2 (日) 11. 7 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日経 (朝刊) 毎日 (朝刊) 科学新聞
70 米国誌「US ニュース・アンド・ワールド・レポート」は世界の大学ランキングを初めて公表し、本学が167位に入った	10.31 (金)	日刊工業
71 宮田令子学術研究・産学官連携推進本部教授がプロジェクトマネージャーに選ばれた内閣府の「革新的研究開発推進プログラム (ImPACT)」のテーマが「進化を超える極微量物質の超迅速多項目センシングシステム」に決定	10.31 (金)	日刊工業
72 本学の学生などが参加しシンガポール航空の従業員の業務を体験するプログラムが行われた	10.31 (金)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
73 第46回全日本大学駅伝 国立大学、伊勢路を駆けける：本学は東海地区選考会で2位となり、出場を逃す 東海学連選抜として和田健志さん大学院2年生、池亀 透さん大学院1年生が参加	10.31 (金)	朝日 (朝刊)
74 シリーズあなたも騙される～実録ニセ電話詐欺～ 武田一哉未来社会創造機構教授は「電話の声は肉声と違う」と語る	11. 1 (土)	中日 (朝刊)
75 「はやぶさ2」52億キロの旅へ 渡邊誠一郎環境学研究所教授は「はやぶさ2」が目指す小惑星の物質の採取について「宇宙の中で有機物がどのように進化してきたかの物証になる」と語る	11. 2 (日)	日経 (朝刊)
76 病院の実力：胃がん 医学部附属病院の実績が紹介される	11. 2 (日)	読売
77 物理学賞 受賞まで20年 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授の青色LEDの研究が取り上げられる	11. 3 (月)	毎日 (朝刊)
78 科学の扉 次世代のDNA読み取り術 馬場嘉信工学研究科教授はゲノム解析が「さらに低コストになれば、病院や診療所の外来で患者のゲノムを調べるようになるかもしれない」と語る	11. 3 (月)	朝日 (朝刊)
79 名古屋大学附属図書館における近距離無線通信技術 iBeacon を活用した図書館内案内サービスと、名大の授業 NUOCW、JCOM 「gacco」等への連携サービスを開始	11. 3 (月)	日刊工業
80 高校生 ESD コンソーシアム in 愛知開催：2、3日 豊田講堂で行われた	11. 3 (月)	読売 他2社
81 秋の勲章：瑞宝中綬章 中尾祐治本学名誉教授、日比 裕本学名誉教授、瑞宝小綬章 伊藤嘉房本学名誉教授 (医療技術短期大学部)	11. 3 (月)	中日 (朝刊)
82 木股文昭本学元教授は御嶽山の火山活動について過去3回の噴火では、最長約3ヶ月前から山頂の直下で微弱地震が頻発していたと指摘し「今回も同様の地震が観測されており、噴火の予兆だったかもしれない」と語る	11. 3 (月)	日経 (朝刊)
83 京都ゆかりのノーベル賞受賞者で野依良治本学特別教授、益川敏英同特別教授、小林 誠同特別教授、下村 脩同特別教授、赤崎 勇同特別教授が取り上げられる	11. 4 (火)	日経 (朝刊)
84 附属図書館2014年秋季特別展「時を超える贈り物—所蔵資料が語る学びの世界—」開催：10月18日～11月6日まで	11. 4 (火)	朝日 (朝刊)
85 第9回中学生英語スピーチコンテスト 1年生の部 最優秀賞 大友志穂さん教育学部附属中学校1年生	11. 4 (火)	毎日 (朝刊)
86 塩川和夫太陽地球環境研究所教授がばらばらになるオーロラをとらえた	11. 4 (火)	毎日 (夕刊)
87 書籍「青い光に魅せられて」赤崎 勇本学特別教授著	11. 4 (火)	日経 (夕刊)
88 「ESD 大学サミット」が9日に豊田講堂で行われる	11. 4 (火) 11. 6 (木)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
89 本学や九州大学、農業生物資源研究所などの研究グループはトビイロウンカに幅広い抵抗性を有するイネの遺伝子を特定	11. 4 (火) 11. 7 (金)	毎日 (夕刊) 日刊工業
90 文化勲章を受章した天野 浩工学研究科教授が勲章を受け取った	11. 4 (火)	毎日 (朝刊) 他4社
91 文化勲章を受章した天野 浩工学研究科教授が天皇、皇后両陛下が開いた茶会に出席	11. 9 (日)	毎日 (朝刊)
92 本学は文部科学省の補助で火山の観測を強化し山岡耕春環境学研究所教授は「噴火のメカニズムを調べるとともに、マグマ噴火への移行を含めて推移を観測する」と語る	11. 5 (水) 11. 6 (木)	日経 (朝刊) 他2社 朝日 (朝刊)
93 読売新聞講座「フクシマと原子力の未来」開催：5日 読売新聞東京本社企画委員が留学生約30人に講義	11. 6 (木)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
94 中日新聞月イチ:2014年10月 今月のトピック 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授の2014年度ノーベル物理学賞受賞が取り上げられる	11. 7 (金)	中日 (朝刊)
95 愛知県立惟信高校創立90周年を記念する講演会で丹羽宇一郎本学名誉博士が講演	11. 7 (金)	朝日 (朝刊)
96 本学や大同大学が中部の中小企業グループ「MASTT」と共同開発した超小型人工衛星「ChubuSat-1」(通称金シャチ1号)が6日、ロシア・ヤスネ基地から打ち上げられた	11. 7 (金) 11. 8 (土)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売
97 本学などが開発し6日にロシアから打ち上げた超小型人工衛星「ChubuSat-1」(通称金シャチ1号)が軌道にのって、日本上空を通過したことを確認する信号の受信に成功	11. 8 (土)	日経 (夕刊)
98 大阪大学が眼球の動きから統合失調症を高精度で判別できる手法を開発し、今後本学や東京大学と協力して研究を進める方針	11. 8 (土)	日経 (朝刊)
99 環境学研究科と豊山町は交通渋滞などの課題解決のため協力する協定を結んだ	11. 9 (日)	中日 (朝刊)
100 10月読者の声から:ノーベル賞に賛賞 赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授のノーベル物理学賞受賞のニュースに大きな反響	11. 9 (日)	読売
101 山田清文医学部附属病院薬剤師教授などの研究グループは脳の海馬にある「ガーディン」がリンと結合することで、記憶が形成、維持されていることをマウスを使った実験で突き止めた	11. 9 (日) 11.11 (火)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
102 サイエンスカフェ「名古屋大学の地球環境科学」御嶽山の噴火はなぜ予測できなかったのか?火山監視の現状と課題:8日 熊谷博之環境学研究科教授が講義	11. 9 (日) 11.13 (木)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
103 ニュースのおさらいジュニア向け:赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授が2014年度ノーベル物理学賞を受賞	11.10 (月)	朝日 (夕刊)
104 天野 浩工学研究科教授が赤崎記念研究館に来訪された下村博文文部科学相に青色LEDの研究成果を説明	11.10 (月) 11.11 (火)	中日 (夕刊) 読売
105 未来へつなごうESDユネスコ会議:アフガニスタンで女子教育に尽力するシャバナ・バシージラシーフさんの講演を聞いた佐藤有寿さん国際開発研究科大学院生は「母国に貢献したいという思いで勉強することは日本人にはあまりない。とても刺激を受けた」と語る	11.11 (火)	毎日 (朝刊)
106 ノーベル賞「名大」、文系も主役「N大」を舞台にしたマンガ「高杉さん家のおべんとう」がヒット	11.11 (火)	中日 (朝刊)
107 ESDユネスコ世界会議:学生200人会議支える 渡辺健太さん経済学部4年生と深谷祥葉さん農学部4年生がボランティアとして活躍	11.11 (火)	朝日 (夕刊)
108 名古屋大学附属図書館の近距離無線通信技術iBeaconを活用した図書館内案内サービスなどの新サービスについて 佐野 充環境学研究科教授は「自主学習の力を高めて欲しい」と語る	11.11 (火)	朝日 (夕刊)
109 石黒直樹医学部附属病院院長など国立大学付属病院長会議が今年4月から8%に引き上げられた消費税が国立大学病院の経営に負担となっている現状を解説	11.12 (水)	科学新聞
110 時のおもり:軍事化する宇宙 池内 了本学名誉教授	11.12 (水)	中日 (朝刊)
111 産業春秋:益川敏英本学特別教授が初の海外旅行がストックホルムのノーベル賞受賞式だったことが取り上げられる	11.12 (水)	日刊工業
112 天野 浩工学研究科教授が山口俊一科学技術担当相を表敬訪問	11.13 (木)	中日 (朝刊)
113 時流の先へトヨタの系譜:第4部 支える企業群〈番外編〉赤崎 勇本学特別教授と天野 浩工学研究科教授の指導を受け青色LEDの製品化に成功した豊田合成株式会社	11.13 (木)	中日 (朝刊)
114 横顔:総長に就任する松尾清一医学系研究科教授	11.13 (木)	日刊工業
115 東海・北陸連携コンポジットハイウェイ構想キックオフイベント「記念式典・記念講演会・交流会」開催:12日 松尾清一医学系研究科教授は「研究機関を結び、世界に冠たる研究成果を生み出したい」と語る	11.13 (木)	日経 (朝刊) 他4社
116 近現代史研究会11月例会開催:15日 文学部130小会議室で行われる	11.13 (木)	読売
117 鶴舞キャンパスで新研究棟の完成記念式典が開催され濱口総長は「いよいよ次のノーベル賞の下地ができた。これからの100年に向かっていきたい」と語る	11.14 (金)	朝日 (朝刊)
118 渡邊誠一郎環境学研究科教授は欧州宇宙機関が探査機の彗星着陸に成功したことを受け「探査の運用について欧州の科学者から情報を得て学んでいきたい」と語る	11.14 (金)	朝日 (朝刊)
119 平成26年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰:中井貴美代医学部附属病院看護師	11.14 (金)	読売
120 名古屋大学レクチャー2014開催:12月6日 水田 洋本学名誉教授と理化学研究所新興・再興感染症研究ネットワーク推進センター長永井美之本学卒業生が講演	11.14 (金)	中日 (朝刊)
121 世界糖尿病デー記念公開講座:15日 医学部附属病院中央診療棟3階講堂 糖尿病の基礎知識やケアの方法を紹介	11.14 (金)	中日 (朝刊)
122 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授はホルモンが一人二役を演じる仕組みを解明	11.14 (金)	科学新聞
123 名古屋・栄「NAGOYAアカリナイト」点灯式開催:14日 同式に参加した天野 浩工学研究科教授は「ものすごくきれいでびっくりした。LEDをもっと使ってもらえるように研究に励みたい」と語る	11.15 (土)	朝日 (朝刊) 他4社
124 「中根」の目 データが語る:ノーベル賞受賞者博士号取得1位 名古屋大学	11.15 (土)	毎日 (朝刊)
125 アット@大学:国際的な人材育成促進を 第1回「@大学倶楽部フォーラム」で対談する文部科学省学生・留学課長 渡辺正実氏元本学総長補佐	11.15 (土)	毎日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**10月8日(水)～1月30日(金)**  
 場 所：附属図書館医学部分館  
 2階入口ホール  
 時 間：9:00～20:00(平日)  
 (1/5～1/7は9:00～17:00)、  
 13:00～17:00(土曜日)  
 休 館 日：日・祝日、12/29～1/3  
 入 場 料：無料

## 附属図書館医学部分館第8回ミニ展示会 「医心 絵心ー医師たちの画力ー」

内 容：愛知医科大学の解剖学者 奈良坂源一郎の博物画、県立愛知医科大学の皮膚科学者 太田正雄(木下李太郎)の絵画など、解剖図だけでなく、人物、静物、動植物などの多様なモチーフに発揮された先輩医師たちの素晴らしい画力を展示公開する



[問い合わせ先]  
 附属図書館医学部分館 052-744-2505

**11月5日(水)～1月30日(金)**  
 場 所：博物館野外観察園  
 セミナーハウス2階  
 時 間：10:00～16:00  
 休 館 日：土・日・祝日、12/27～1/4  
 入 場 料：無料

## 博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示 「スノーボールアースからカンブリア爆発へ」



[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

**12月3日(水)～18日(木)**  
 場 所：中央図書館2階ビブリオサロン  
 時 間：9:00～17:00  
 対 象：一般  
 参 加 費：無料

## 「名古屋大学附属図書館蔵水田文庫貴重書目録」 刊行記念展示会



[問い合わせ先]  
 附属図書館情報管理課 052-789-3666

**12月9日(火)～4月11日(土)**  
 場 所：博物館ミュージアムサロン  
 時 間：10:00～16:00  
 休 館 日：日・月曜日、12/27～1/5  
 入 場 料：無料

## 第20回博物館特別展 「2014年ノーベル物理学賞 青色LEDの開発研究」



[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

**12月13日(土)～1月31日(土)**  
 場 所：博物館2階展示室  
 時 間：10:00～16:00  
 休 館 日：日・月曜日、12/27～1/5  
 入 場 料：無料

## 第29回博物館企画展「野外観察園のボタニカルアート」

[解説：ボタニカルアートの技法]

場 所：博物館2階展示室  
 時 間：13:30～15:00  
 テーマ：「花の描き方」(12/17)、「葉の描き方」(1/14)、  
 「枝の描き方」(1/21)、「実の描き方」(1/28)  
 講 師：東海林富子氏  
 (博物館友の会ボタニカルアートサークル講師)

内 容：講師が実際に絵を描きながら技法について解説する  
 参 加 費：無料



[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**12月20日(土)、1月24日(土)**

場 所：博物館 2階展示室  
時 間：14:00～15:00  
参 加 費：無料

## 博物館コンサート NUMCo

「folklore クリスマスコンサートーインカからの贈り物」(12/20)

演奏曲目：「コンドルは飛んでいく」、「花祭り」、他

出 演：ティエラブランカ

内 容：ケーナ、チャランゴなどの楽器解説・民族楽器体験コーナーも用意

「フラメンココンサート」(1/24)

演奏曲目：「セビジャーナス・ブレリア」、他

出 演：Jorge Millaqueo 氏 (Cante (唄))、

木村彰人氏 (Toque (ギター))、長谷川智則氏 (サクソ)、

稲吉直子氏・内田好美氏・田中あや氏・西川正恵氏 (Baile (踊り))

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**12月23日(火)**

場 所：博物館 2階実験室、展示室  
時 間：13:00～16:00  
定 員：24名  
対 象：小学5年生以上、一般  
参 加 費：50円 (保険料)

## ミクロの探検隊®

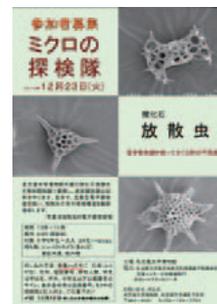
「微化石 放散虫－電子顕微鏡を使ってさぐる

形の不思議」

内 容：博物館所蔵の微化石放散虫を実体顕微鏡で観察し、走査顕微鏡の試料を作った後、自分で走査型電子顕微鏡を使い、放散虫の形や微細構造を観察撮影する

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



**1月7日(水)**

場 所：減災館 1階減災ギャラリー  
時 間：18:00～19:30  
定 員：50名  
対 象：一般  
参 加 費：無料

## 第44回げんさいカフェー Gen Science Café

講演題目：「シリーズ減災温故知新④

『阪神・淡路大震災から20年で、考えなければならないこと』

講 演 者：隈本邦彦 (減災連携研究センター客員教授)

(会場にてドリンク等の注文が必要)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468



**1月24日(土)**

場 所：理農館 3階335号室  
時 間：10:00～15:30

## ビジネス人材育成センター 平成26年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「博士たちの自己分析・強み発見・仕事研究－『自己理解の促進』

自分の強み・弱みを把握し、最高の状態にする方法を学ぶ」

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

### 【訂正とお詫び】

名大トピックス258号 (2014年11月発行) で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

P21 本学関係の新聞記事掲載一覧

50 丹羽宇一郎本学名誉博士がグローバルビジネス学院会長に就任し「経済の現場を知った学者、専門家を育てたい」と語る

【誤】 グローバルビジネス学院 【正】 グローバルビジネス学会

名大トピックス No.259 平成26年12月15日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

表紙

ナショナルコンポジット  
センター大型プレス形成  
システム  
(平成26年9月17日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

## 152 名古屋大学創立75周年 — 50周年から四半世紀の名大 —

名大は、1939(昭和14)年に名古屋帝国大学として創立され、今年で75周年を迎えました。1989(昭和64・平成元年)年の50周年から四半世紀という区切りの年です。その間、名大は大きな変化を遂げました。

1990年代は、大学設置基準の大綱化を受けて、教育研究体制の2つの大改革が行われました。1つは、1993~94年にかけての教養部廃止と4年一貫教育への移行です。もう1つは、1990年代の後半を中心に進められた大学院重点化です。これに伴って、学部を持たない大学院である独立研究科も設置されるようになりました。

21世紀に入ると、「人々の幸福に貢献する」ための「人間性と科学の調和的発展」(2000年制定の名古屋大学学術憲章)をめざし、産学官及び文系理系の連携、社会貢献等を具現化するための施設や組織が整備されていきました。そして何と言っても、2004年度から名大は国立大学法人に移行し、新しい歴史の一步を踏み出しました。

25年間に共通の変化としては、名大の国際化が挙げられます。留学生の受け入れは、1980年代から増加率が急伸びましたが、増加の絶対数でいえば90年代にめざましいものがありました。21世紀に入り、一時横ばいの時期がありましたが、2009年にグローバル30の拠点に採択されたことをきっかけに再び増加へ転じ、今や名大生の10人に1人が留学生です。とくに現在の濱口総長が就任してからは、その意欲的な運営戦略によって、アジア諸国との連携が飛躍的に強化されました。

そのほか、老朽化・狭あい化が進んでいた施設が改善され、多くの新築のほか、既存の建物も耐震工事等でリニューアルされ、キャンパスも大きく様変わりしました。

そして、25年前はゼロであったノーベル賞受賞者が、21世紀に入って急増し、今や6名を数えるに至り、名大がより世界にその名を知られるようになったことも忘れてはならないでしょう。



1	2	3
4	5	

- 1 4年一貫教育の施行を報じる『名大トピックス』(1994年)。
- 2 カンボジア王立農業大と名大の学生によるフィールドワークに参加する濱口総長(カンボジアにて、2012年)。
- 3 「国立大学法人名古屋大学」看板除幕式(2004年)。
- 4 竣工直後の多元数理科学棟(理1号館、1997年)。大学院多元数理科学研究科の設置は1995年。
- 5 創立75周年を記念して名大が刊行した『歴代総長と名大史—名古屋大学75年の軌跡—』(大学文書資料室編、A5版43頁、オールカラー)。入手の申し込みは大学文書資料室まで。